



東海支部報

日本山岳会東海支部

No. 149 April. 1. 2017

発行 公益社団法人
日本山岳会東海支部

〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMCビル

電話：052-332-8363 FAX：052-322-7924

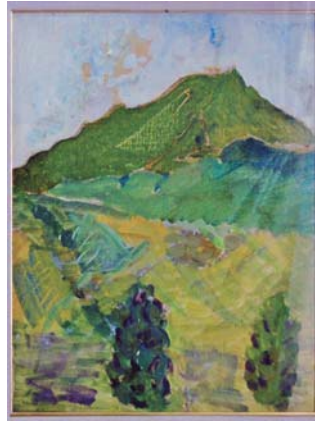
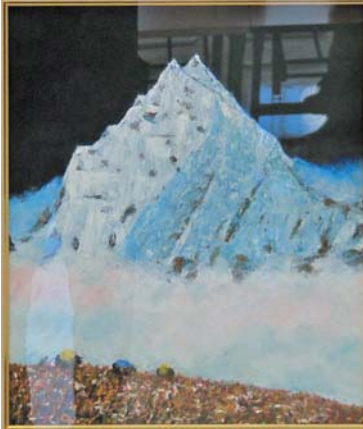
郵便口座 00800-5-13749 「日本山岳会東海支部」

銀行口座 三菱東京UFJ銀行 覚王山支店

普通1222073 「日本山岳会東海支部」

編集 星 一男

印刷 (株) 浅井隆文社



スケッチクラブ 第3回作品展より 左上：タムセルク 右上：暁雲鹿島槍ヶ岳
本文 P9 詳細 左下：アルプホルン奏者との出会い 右下：恵那からの御嶽

目次

○登山学校の開校	高橋玲司	2	○支部友コーナー	田中 進	13
○平成29年新年懇親会報告	毛利邦男	3	○東海支部の蔵書からの一冊⑩	石田文男	14
○沖 允人会員第6回日本山岳 グランプリ受賞報告	星 一男	4	○東海岳人列伝(5-2)	西山秀夫	16
○ロールワリンカン登頂	吉川拓矢	5	○新刊紹介『わが山の日々』	安藤忠夫著 小川 務	19
○厳冬期劔岳小窓尾根登攀	藤寄正智	6	○委員会報告 技術向上 青年部 登山教室 ボランティア		20
○会報「山」のPDF版配信を受けて	編集委員会	8	○会務報告	毛利邦男	23
○同好会コーナー 山中光子	村中征也	9	○ルーム日誌・会員異動	毛利邦男	26
○リレーエッセイ⑥			○INFORMATION		26
マカルー遠征余聞ーその6ー	尾上 昇	10	○編集後記	星 一男	27

登山学校の開校

支部長 高橋玲司

《はじめに》

今度、東海支部では、支部の自主運営による登山学校を開校いたします。以下その主旨と目的を述べさせていただきます。

現在の日本山岳会は、古い伝統と多くの会員を誇る日本一の山岳会といわれ、これまでも多彩な事業を展開し、日本の登山界をリードしてきています。

今回登山学校を設立するに当たり、その最大の目的とするところは、時代のニーズ、若者のニーズを最大限取り込むこと日本山岳会の新しい行方を探る試金石となればとの思いにあります。

このことを基本の指針として以下の項目に沿って運営したいと思っています。どうか、支部員の皆様のご理解を賜り、是非登山学校の運営を成功裡に導きたいと願っています。何卒宜しくお願い申し上げます。

《目的》

若手人材の獲得

日本山岳会に求められているのが会の若返りです。平均年齢 68 歳のスポーツクラブはもはや、老人クラブとの誇りは、免れられません。残念ながら、設立当初のサロンという観念では、若者を繋ぎ止められません。積極的な若者への魅力を感じさせる施策の一つとして登山学校を位置付けています。

新入会員などへの指導体制の確立

入会勧誘はするものの、入会後に受ける『どんな指導をしていただけるのですか』という質問に対し、的確に答えられていないのが実情であり、指導に対しても会が請け負う登山教室に入って下さい位しか応えられないのが実状です。現在の登山教室は、メディアの主催でいわば請負業であります。その結果、支部の自主性が発揮しづらくどうしても内容がツアー化してしまい、せっかく会員になっていただいても東海支部の山行もツアー登山を行う山岳会と勘違いされる事となりかねません。

既存会員への指導体制の確立

入会はしたものの、満足する登山技術が習得出来ず、支部に対して指導の期待感を持つ方は多くみられます。こういった既存の会員の登山技術の底上げが、支部員のスキルアップにつな

がり、これを通して新しい人材の発掘の場とすることも目的したいと思います。

一体感の持てる交流

『山』を通じて、人生において素晴らしく豊かな生活を提供する場所が日本山岳会東海支部の大きな存在理由であります。同好の志が集い、講師と受講生が交流することが最も大切だと感じます。

《登山学校の概要》

名称 公益社団法人日本山岳会東海支部登山学校

校長 高橋玲司（東海支部長）

運営 支部内に設置する登山学校運営委員会が担当

運営方法

体系的な指導と受講生の自主的な運営参加が、この学校の開校を通して、広く若い人材を求め、明日の東海支部を築く礎としたいとも考えています。是非支部員・支部友の皆様方のご理解を賜り、登山学校へのご協力をお願い申し上げます。そして登山学校を通じて、山と向き合い、お互いがひざ詰め交流を行い、『日本一楽しい山岳会』を実践してください。

グレード

- I これから山登りを始めたいという人を対象とした教室。（チャレンジ教室）
- II 今迄経験はあるが、これを契機に再度基礎から勉強し直したい人を対象とした教室。（レベルアップ教室）
- III 今迄経験はあるが、これを契機にもう少しレベルアップしたい人を対象とした教室。（ステップアップ教室）

内容

1. 7月をスタートとする1ヶ年。
2. 教室のグレードを3つに分ける。
3. 各教室リーダー、サブリーダー、受講生を入れて1教室辺り7～8名とする。
4. 月1回の現地山行と座学を基本とする。
5. 支部員・支部友の受講も可とする。
6. 受講料は、9,000円とする。但し、支部費、支部友費分は減額される。
7. 外部受講生は、支部友扱いとする。

平成29年新年懇親会報告

総務委員長 毛利邦男

恒例の新年懇親会が参加者合計98名(内講演会のみ5名)を得て1月21日(土)17時からウイルあいち(愛知県女性総合センター)で開催された。



高橋支部長 挨拶

最初に高橋支部長から「今年も“トリプルワン”(安全第一・一体感を持つ・No.1を目指す)のスローガンに取り組んでいきたい」旨の年頭の挨拶があった。

講演会

今年はNHKの山岳カメラマン関 祐一氏を講師にお招きし『山岳番組の舞台裏』と題して映像を交えながら講演をして頂いた。関氏は明治大学山岳部出身で山岳カメラマンに憧れ1999年NHKに入局。数々の僻地番組の取材、と同時に山岳カメラマンとして活躍されている。

講演は山番組の変遷の解説からはじまり、最近取り組んだ番組(I. さわやか自然百景、日本百名山 II夫婦で挑んだ大岩壁、IIIグレートトラバース、パタゴニアレースなど)の映像紹介と同時に、それぞれの番組制作にあたっての‘必要な要素、番組の狙い’などを解説し、撮影のポイントを映像で紹介して頂くという、一般に放映された映像だけではわからない部分まで徹底解説をして頂いた。

さらに番組制作に使用する機材の進化、アスリートカメラマンの登場についても映像を交えて解説頂き、最後にBS1で去る1月3日に放送されたアラスカ・デナリにおける佐々木大輔氏の「究極のスキー大滑降」の事前調査・

準備の紹介と本年6月に予定されている本番に向けての準備についての講演を頂いた。この講演を通じて、番組制作にあたっての命を懸けた撮影スタッフの方々の苦労と同時に山岳撮影技術・登山技術のレベルの高さを改めて、認識させられた。



関 祐一氏の講演

懇親会

講演会終了後は、同じ会場で懇親会に移った。片岡副支部長の発声による乾杯の後、関裕一氏も交え和気あいあいの雰囲気の中、会場は大いに盛り上がった。又九州在住の石原國利名誉支部員から例年通り黒田武士の寄贈があった。

また、支部員酒井大輔氏には、会場のグリルサービスで、大変ご協力いただいた。



片岡副支部長の乾杯の音頭

沖 允人支部員 第6回日本山岳グランプリ受賞報告

支部報編集委員会 星 一男

当会員の沖 允人氏が、第6回日本山岳グランプリを受賞した。この賞は、公益社団法人日本山岳協会が永年にわたる登山・クライミング実践者や山岳文化研究者などに功績のある個人やグループに贈るものである。今回は、東海支部が日本山岳協会110周年記念事業の一環として、2015年12月に出版した「インド・ヒマラヤ」編纂出版が高く評価されたもの。

日本山岳協会2017新春懇親会での授賞式

授賞式は本年1月14日に東京・九段のアルカディア市ヶ谷私学会館で、恒例の日本山岳協会・新春懇談会の中で行われた。

授賞式では、八木原啓明会長から賞状と記念の盾が授与された。



受賞祝賀会で挨拶する沖氏

授賞祝賀会を開催する

今回の受賞について、東海地区の山岳団体などに記念の祝賀会開催を呼びかけたところ、愛知岳連、中京山岳会、名城大学関係者など、沖氏の幅広い交友関係者の賛同を得て、2月28日(火)18時30分からレストラン「リビエール」で開催した。

第一部は、沖氏が「東海地区とインドヒマラヤ」と題して記念講演が行なわれた。

第二部は、懇親会に移り、最初に表彰の推薦人尾上元日本山岳協会会長が、経緯報告を行った。その後は愛知岳連・安藤会長、東海支部・高橋支部長など各会代表による祝辞が続く。梶田中京山岳協会会長の乾杯の音頭で祝宴が始まり、9時過ぎに散会となった。

沖 允人氏の略歴

1957年 中京山岳会(名古屋市)

1965年 日本山岳会に入会(終身会員) 東海支部所属

東海支部では、海外登山委員として海外登山情報の蒐集と東海山岳、東海支部報の編集担当
1967年 The Himalayan Club に入会(終身会員)

1970年 日本山岳協会賛助会員

1998年 名誉山岳博士(インド)を授与

2013年 日本山岳会永年会員

海外登山では、1965年ネパールヒマラヤ・ダウラギリII(7751m)全日本山岳連盟・副隊長としての遠征から、2011年ラダック・パンゴン山脈・マリ峰(6585m)栃木県南地区山岳協議会・隊長・初登頂まで、約半世紀にわたり海外登山を経験する。



受賞の盾

を残された著名な方々が続いている。

日本山岳グランプリの第一回は、2010年度(平成22年)にNPOヒマラヤグリーンクラブと、斎藤一男氏に授与された。第二回は、翌年に平山ユージ(裕治)氏、第三回は山森欣一氏など、顕著な功績



授与式後に八木原会長と

Rolwaling Khang 登頂

青年部 吉川拓矢

昨年の9月末～11月初旬にかけて、山岳ガイドの花谷泰広氏が主宰するヒマラヤキャンプに参加した。この隊は花谷氏と公募で集まった若手のメンバーでヒマラヤの未踏峰、または未踏ルートに挑む遠征隊であり、今回の目標はロールワリン地方のRolwaling Khang (6,664m) という未踏峰だ。

メンバーは7人(1人はBCマネージャー)で半分以上は私(28歳)より若いメンバーであった。普段先輩方と登る事の多い私にとっては、あまり慣れない立ち位置だったが、同じ目標に向かう者同士、刺激し合いながら良い環境で山に取り組むことができた。

9月25日にカトマンズに集合し3日間の準備期間を挟んで出発。約一週間で標高約4,700mのBCに到着したが、悪天の予報のため数日間停滞となった。私はこの辺りから高所の影響を受け始め、頭痛や倦怠感、顔のむくみなどの症状に悩まされた。

10月11～14日にかけて、高所順応でアタックと同じルートを標高5,900m付近まで往復した。この行程では不安定なガレ場のモレーンが続き、歩きにくい上に、尖った石が新品の靴をズタズタにしてしまった。初めて見るRolwaling Khangは実に堂々たる山容で、とても未踏だとは思えなかった。高所順応後、天気予報との兼合いで、アタックまでの休養は2日間のみとなった。

アタック初日は標高5,500m付近まで登り、翌日に標高6,100m付近のコル上に最終キャンプを設営した。翌10月19日は、出だしから約50度の雪壁で、辛い行動となった。300mほどの雪壁をスタカットで登ったが、調子の上がない私は結局全てフォローで登った。稜線に出るとあとは簡単な尾根歩きとなり、13時過ぎに全員が頂上に立つことができた。静かな頂からはエベレストを始め、名だたる峰々を眺めることが出来た。下降は雪壁を懸垂下降し、10月20日の夜にBCに帰還した。

今回、個人的には課題も多く、悔しさの残る登山となった。しかし、そのおかげで今後の山への取り組み方や目標が見えてきたように思う。



Rolwaling Khang

また、ヒマラヤキャンプは今後も継続予定である。貴重なチャンスでもあるので意欲のある若手には是非参加を検討してほしい。



雪壁をリードする飯田副隊長



50度の雪壁を登る

厳冬期劔岳小窓尾根登攀

青年部 藤寄正智

メンバー：L早戸健太郎、藤寄正智の2名

1月3日

冬季ゲート手前の伊折に車を止めて、雨が止んだ10時過ぎに出発。馬場島までの8キロの長いアスファルト道を歩く。

初めての冬の長期山行、かつ雪深い劔ということで、今回は荷物の軽量化を努めた。ポールを含めて750gの超軽量テント、燃料節約のためのジェットボイル、スリーシーズン用のシュラフ等、それでもザックの重量は27キロぐらいあり、体に堪える。

馬場島で、富山県警に入山手続きを行い、いろいろ情報をもらうが、私たち以外に正月に入山したパーティーは全パーティー下山しており、これからはこの劔の山域は私たち二人だけという何とも贅沢な山行となった。ヤマタンを受け取り、雪がちらつく中、ワカンをつけラッセルしながら今日の目的地である雷岩を目指す。



小窓尾根へ

雷岩で早戸さんが用意してくれた、おいしい鍋とビールで入山祝いをし、翌日に向けて早めに就寝となる。

1月4日

尾根に出るまでの急なルンゼの登攀と、雪崩を警戒して日の出前に出発する。ルンゼ脇の木が茂っている部分にルートを取りながら進むが雪の深さは膝上くらい。二人でラッセルを交代しながら、日の出の時間には小窓尾根上に出ることができた。尾根上は風が強く、雪も降っていたが、所々、目印である赤布があり、迷う事はない。尾根上に出て少しはラッセルから解放されるかと思いきや雪はたっ

白 萩川沿いを進むが雪が少ないせいか、十数回も渡渉を行う。

雷岩で

ぶりついており、膝上ラッセル、途中の尾根上の下りでは、足元から雪崩が発生しヒヤッとする場面も。疲れもあり、14時前に行動を切りあげ、標高2100m付近でテントを張る。風雪を直接受けるのを防ぐため、事前に予習したイグルー作りのノウハウを活かし、テントの周りに雪のブロック積み上げたおかげで、風の音を気にすることなく眠る。

1月5日

前日に天気が崩れるとの予報で停滞を決めていたため、7時ころ起床した。しかし、雪は降っているものの風は弱く、行動できるのではないかと判断し、10時に出発する。ニードルと呼ばれる尖った岩峰を右に巻き、ドームとのコルに早戸さんが懸垂下降を始めるが、途中で懸垂ができる中間支点が見つからず、登り返すとの合図。他のパーティーの記録を見て、おかしいと思いつつも尾根に上がってみると急な下りもなく繋がっており、歩いて下降することができた。

ドームの登りは急な雪壁だがロープを出すこともなく、難なく登り切り、そこでこの日はタイムアップ。



ピラミッドと呼ばれる岩峰の手前とのコルで半雪洞を掘りテントを張る。この日の夕食は

半雪洞にテントを張る

レトルトの牛

井とアルファ米。食事は山に入っている時の一つの楽しみでもあったので、軽量化と言いつつもレトルト食品を持ってきて正解であった。尾根上は携帯の電波がつながるため、ヤマテンの天気を確認し、山頂に向けての行動を話し合う。幸いに2日間天気が良いという事もあって明日頑張つて、三ノ窓か長次郎のコルまで行き、7日に下山しようと決め、就寝とする。

1月6日

日の出とともに出発、相変わらず膝上から腰にかけてのラッセルに苦しみながら進む。間もなく正面にピラミッドがあらわれた。

残地してあるフィックスロープがあったが、相当古く、所々雪にうまっていたため使わず、



核心部分

一カ所だけ、思い切って体を持ち上げないといけないう箇所があり恐怖を感じた。その後、



ピラミッド雪壁

るのにロープを出す)、ようやく劔岳本峰へ続く稜線上へ出ることができ、後立山日本海も望むことができた。



劔への稜線を望む

がってしまう状況だ。それを察してか、早戸

早戸さんリードで1ピッチ(40m)ロープを出した。

コンテで雪壁を登る。マッチ箱と言われる岩峰は左から巻き(一カ所10mだけ岩場を登

前日から少し歩くだけで息が上がり、調子が出ないと思っていたが、この日は昨日以上に調子が出ず、息が上

さんは終始先行し、ラッセルをしてくれた。稜線上を上り下りしながらついていくだけで精一杯となり、もうテントを張りたいたいと思っていたころ16時ようやく三ノ窓に到着し、一安心。、雪洞を掘りテントを張る。

三ノ窓まで来てしまえば、明日は下山するだけ、食料を余らしても荷物になるだけなので、この日の夜は豪華に2食分、レトルトの黒カレーとフリーズドライの牛丼をたいらげて就寝。

1月7日

4時に出発、池ノ谷ガリーの雪は良く締まっていたので快適に登れた。4時半に池ノ谷乗越に到着。真っ暗の中、稜線上を進むのは危険であるが、偵察の時にルートはしっかりと確認し、心得ていたためヘッドランプの明かりを頼りに進む。

長次郎の頭を右に巻き、万歳ラッセルも挟みながら、長次郎のコルに到着したのが6時前。「山頂で御来光を拝めるかもしれないですね」と話しながら、山頂へと続く最後の雪壁を登る。そして、日の出前の6時半に山頂に立つことができた。景色は素晴らしく、なによりも山頂に立てたことがうれしかったが、何枚か写真を撮った後、少しでも早く下山して、風呂とビールを浴びるようにたくさん飲みたいという感情の方が勝ってしまい、「劔の山頂で御来光を拝む」というスペシャルな時間を無視し、早々と山頂を後に早月尾根を下山した。

山岳会に入り冬山を初めて6年となるが、色々な人と出会い、仲間がいたおかげで山を楽しく続けられていると思う。そして、今回、憧れであった冬の劔に登こともでき、今までにない充実した5日間過ごすことができた。最後に、パートナーの早戸さんに心からの感謝の気持ちを伝えたい。



チンネ

会報「山」のPDF版配信を受けて

支部報編集委員会

支部報のワード文章の音声化サービスを開始している。また、前号より本部から「山」のPDF版の提供を受け、視覚障がいのある会員の皆様にも配信できるようになった。以下は視覚障がいのある会員の皆様の声である。

山田 弘会員

私が日本山岳会の会員になって早8年が経過しました。この会の会員になることは山好きな私にとって到底叶えられそうもない夢のような話でしたが、東海支部の皆様のご理解とご支援によってその夢が実現し、毎年恒例の年末の晩餐会で皇太子殿下のご隣席の元、新入会員のご挨拶を申し上げる機会を得たことは、一生の宝となりました。

その後私はボランティア委員会の活動を中心に参加し、充実した山行を満喫していますが、活字文書で送られて来る日本山岳会の会報「山」や東海支部の支部報には戸惑うばかりでした。視覚障がい者が一般の多くの会議などに参加した時配布される活字文書には困惑させられます。

そこで私はボランティア委員会の会議の中で、視覚障がい者もITの進歩のおかげで活字文書を読んだり、ネットをほぼ支障なく扱えることを説明しました。パソコンにスクリーンリーダーPC-Talkerをインストールすることによってこれが可能になったのです。

そして会報や支部報もワード版・PDF版であれば人の目を借りることなく、他の会員と時間差なく読むことができることを訴えました。

東海支部報は昨年の秋から、そして会報「山」は今年1月から配信を受けています。これによって視覚障がい者も名実ともに差別のない正会員としての実感を味わうことができました。昨年4月から施行された「障害者差別解消法」を受けて、公益法人日本山岳会がいち早くこのような取組を実践されたことに深く敬意を払うとともに、心より感謝申し上げます。

馬場恵子会員

PDFでの会報送信は弱視の私にとって有りがたく、有意義にゆっくり聞く事が可能になりました。今までは大きな文字を拾う事ぐらいでしたから。

それに図書館での読み聞かせは事前予約が必要となり難しいですし、PDFで届く会報は全文コピーしてマイエリット(メモ帳)で簡単にいつでも聞く事が出来ますので助かります。このように多くの資料をメール送信するにはどんな手順で送信ができるのか、そんなことも知りたいです。

山岳会の皆様の多大な努力のお蔭だと感謝すると共に、現在の通信機器での広がりについて行けない事も実感しています。

これからも会報の中に明るいニュース、仲間のみなさまの活躍などの会報を声で聞き、共有できる事で山岳会会員として仲間入りができるのではと、そんな事を期待しています。楽しみに届くのをお待ちしております。ありがとうございました。

吉田清恵会員

この度、日本山岳会の方の尽力のお陰で「山」をPDFファイルから自分で音声パソコンを使って読めるようになりました。

それというのも私は視覚障がいがあり今までは紙媒体のため誰かに読んでいただくか、そのまま「本」としてはもっているものの内容を読むことはできない状態が続いておりました。

「山」には、いろんな体験記、特に自分ではなかなか行けない海外の山のお話や苦労話、いろんな山の歴史や季節での風景などなど、自分が行ったことのない山のお話を想像しながらワクワクして読むことができるようになりました。

同じ山でも行った人一人ひとり違う体験となり、思いもそれぞれだったり、そしてまたその時期、季節や天候が変われば山に対する印象も違って、それがまた「山の魅力」だとも感じました。

引き続きこの「山」によって山に魅せられたいと思います。

*支部報編集委員会では、今後もこの活動を継続し、サービスの向上に努める所存である。

同好会紹介コーナー

古道塩の道同好会

山中光子

今年の探索例会は冬の時期に入っても雪が降る予想の間をぬって、長野県上伊那郡飯島町や駒ケ根市を順調に歩くことができた。私達が歩く時には雪の支障が無かった。

飯島町は二つのアルプスが見える町とのキャッチフレーズの通り、素晴らしい山の景色を堪能した。飯島町聖徳寺には聖徳太子自作の像が安置してあったが、1846年の火災にて像は焼失。建物も立派だが裏庭がお墓へと繋がり、素晴らしい紅葉を堪能。少し足を伸ばし関の地藏尊を見る。そこで飯島町に別れを告げ、3本の大きな川の一本目は飯島町の中を流れる与太切川。

二本目の中田切川を渡り、駒ケ根市に入る。入った途端に小山が見える。中腹には飯田線が走り、旧道の入口から飯田線踏切迄は行く事ができる。しかし「急登で危険のため登らないで下さい」との立て看板。以前下見の時は、看板から外れるようにして上迄登ってみたが、旧道からかなり外れてしまった。皆で危険を冒す事はやめ、旧道を大回りして小山の頂上に立つ。展望は素晴らしく、今は歩けないが、昔はこの道を登ったと参加者の方々に伝えた。

駒ケ根市については旧道に関する知識を色々教えてもらい光前寺に向かう道とか、古いお寺等はあるが、古道塩の道に関しては、危険な旧道とあと1か所。小町屋にある如来寺の前を流れる上穂沢川にかかっていた、橋げたを見る位のみ。その後飯田線駒ケ根駅前を通り越し、広く整備された旧道を歩く。大田切駅の手前、山の中腹に広い公園があり、石碑が色々建っているが、ほとんどが戦争中のものだった。



宮田村 大田切渡し場跡付近 役行者像の前にて。

三本目の大田切川を渡ると、宮田村に入る。田切の語源は「山から水が激しく流れ下ること、

滾(たぎ)り落ちる様子」だと言われている。宮田村では、大田切の渡し場跡を見る。昔は荒れ川で伊那谷交通路の最大の難所だったと言われる。同じ伊那谷でも駒ケ根市と宮田村は隣同士でありながら全く文化が違うとも言われている。次回宮田村の学芸員さんと勉強会をするので、色々な事を吸収していきたい。

スケッチクラブ

村中征也

第3回作品展一大勢のご来館に感謝 !!



3月5日の作品撤収

第3回作品展を、2月28日(火)～3月5日(日)に名古屋市の「市政資料館」で開催、支部の皆さん始め、大勢の方に観て頂きました。

支部の新年会会場「ウィル愛知」の向かいにあり、旧高等裁判所の建物を活用した会場で、皆さんにゆったりと観て頂きました。

3回を迎えても腕前は??…平均年齢からもう伸びないよと言われますが、「人の振り見て我が振りを」…登山も人生も同じかと思えます。

スケッチクラブの良さは、登れなくなった方もいますが、「和気藹々けなし合って教え合って」楽しく山を描くことです。会員23名で19名が出品、37点が見事に会場を埋めました。

何より、作品を観て頂くことが必須です。心から感謝しております。最終日には尾上評議員に来て頂き、一緒に写真に納まりました。次回は、来年2月27日(火)から開始の予定ですので、宜しくお願いします。

会費ゼロで門戸開放、もっと会員を増やしたいので、気軽に声を掛けて下さい。

代表…杉田博

事務局…村中征也・武内喜代子

マカルー遠征余聞 その6

常任評議員 尾上 昇

日本—紅白歌合戦—

東海支部のマカルー遠征は、1970年であった。この年の暮、熊沢正夫支部長(マカルー隊総指揮)と原 真さん(マカルー隊登攀隊長)が、NHK恒例の紅白歌合戦の審査員に選ばれたのである。

誠に光栄である。但し、断っておくが、審査員が光栄だと言っているのではない。まして審査員に選ばれたのを喜んでいるのではない。

この年、JAC本部もエベレストに登山隊を送り日本人初の登頂に成功している。両隊には、新聞社の後援がついていた。マカルー隊には、朝日が、エベレスト隊には、読売である。TVは、両隊共NHKであった。マカルー隊は、名古屋局(JOCK)、エベレスト隊は、東京の本局(JOAK)が後援である。

歌合戦の審査員をどちらの隊から出すとしたら、エベレスト隊ということになるのが普通であろう。一般の人からすれば、エベレストは、誰でも知っているが、マカルーという山はほとんどの人が知らない。AKとCKとの力関係からしてもそうであろう。

ところが、NHKは、エベレスト隊よりマカルー隊の登山成果を高く評価したのである。JAC本部のエベレスト隊の派遣の大義は、エベレストはいつか日本人の誰かが登る、それだったらJACが先鞭を付けるのが、相応しい。というものである。確かに一理はある。ヒマラヤ登山をリードしてきているJACの面子とでもいえよう。といっても、エベレストは、成功しても所詮国別でいうと5ヶ国目か6ヶ国目(※)である。JAC本部隊は、一応綾を付けたつもりなのであろう、南西壁にもチームを送っている。もし仮に南西壁の登攀に成功していれば話は別である。

つまりNHKは、登山の実質的な評価として東海支部のマカルーの南東稜初登攀に軍配を上げたのである。まさに正鵠、NHKの炯眼に敬意を表したい。熊沢先生と原さんが紅白歌合戦の審査員になったことを聞いた私は、思わずNHKもやるかと合点したものである。このことが光栄の所以なのである。



BCからのマカルー。右のコンタクトラインが南東稜。

未だにその時のテレビの映像を鮮明に覚えている。観客席の第1列に確か15~6名の審査員がいたが、その中の下手の方に熊沢先生と原さんが二人してネクタイ姿で並んで座っていた。勿論アナウンサーの「今春、世界第5位のヒマラヤの高峰8,460mのマカルー峰の南東稜の初登攀を成功させた日本山岳会東海支部隊のリーダー、熊沢正夫さんと原 真さんです」もしっかり聞き取った。

蛇足である。年が明けて原さんに会った時に「紅白歌合戦どうでしたか」と尋ねた。原さんの返答は「全部紅組に○印付けたった」である。いかにも原さんらしい。ちなみにその年の紅白歌合戦、紅組が勝ったのか、白組が勝ったのかの記憶は、定かではない。

※5ヶ国目か6ヶ国目は、3ヶ国目に北面から登ったと報告した中国隊の記録が、あまりにも杜撰で出鱈目な内容であったことからその登頂の真偽が問われていたことによる。中国隊の後には、アメリカ隊、インド隊が挑戦して成功している。

国語の教科書 一頂上の日章旗—

1970年5月23日東海支部のマカルー隊は、その南東稜からの初登頂に成功した。第2登である。しかも初登のフランス隊の北西稜ではなく、反対側の南東稜である。

登頂成功にまで至る経緯は、苦難と苦闘の連続であった。先ず最初の難問は、登山許可の取得であった。このことは、このシリーズの①に

詳しく記してあるので省く。そして、資金集めも苦勞した。

やっとカトマンズ入りして登山活動をスタートさせたが、先ず最初の試練は、キャラバンの途中の4,000mの二つの峠、シプトン峠越えのピンチである。正直、ここで撤退することになるかも知れないと大いに不安を感じたのは、私一人ではなかった筈である。

そして、登山活動に入ってから南東稜上に立ち上がるブラックジャンダルムとの闘いである。この南東稜は、1961年あのエドモンド・ヒラリー卿が率いる登山隊によって初挑戦が試みられたが、ブラックジャンダルムを望見して、登頂不可能と判断、初登の北西稜に転進したという経緯がある。後日談であるが、東海支部隊の南東稜初登攀の報に接したヒラリー卿は、「まさかあの南東稜を日本人が登るとは」と絶句したという。

艱難辛苦の末、ブラックジャンダルムを克服して、最終のアタックキャンプC6を建設したのが5月18日。幸運にもまだこの年モンスーンがやってこなかった。C6を建設した川口、後藤の両隊員の役目は、2日間に渡ってアタック隊の為に上部ルートを延ばし、フィクスドロプを張ることにあった。

ところが、2日の任務を終えた日、C6に上ってくる筈のアタック隊員の田中、尾崎の両隊員が夕刻になっても到着しないのである。何か手違いが起きたのだと判断。幸い明日も天気が良さそうである。モンスーンの到来も近い。ラストチャンスだと二人は、独自で翌日のアタックを決意した。

結局、二人は頂上直下で断念。途中の8,300m付近でビバーク。翌日、C6入りした田中、尾崎両隊員の見たものは、無人のテントであった。BCも含めて全キャンプが悲痛に暮れた。行方不明だったからである。

後で判ったのだが、C6のトランシーバーが故障していて、川口、後藤の両隊員のアタック決断を連絡出来なかったのである。そんな事知らないBCは、一昼夜二人の行動が不明である。8,000m峰で一昼夜行方不明は、何を意味するであろうか。BCは、遭難と判断した。

両名を良く知る尾上が、明朝BCを発って日本へ立ち帰り家族に報告することを原登攀隊長から命じられた。尾上は、両名のテントに入

り遺品となりそうなものを涙をボロボロ落しながらザックに詰め込んだ。

それでも、田中、尾崎の両隊員は、二人の姿を求めて南東稜の上部の搜索に当たった。夕方、もう駄目だと搜索を諦め掛けた時、ノロノロと降りて来る二人を発見。一人は、雪盲で目をやられ、もう一人は、手と足の指の凍傷で歩くのがやっとの状態であった。田中、尾崎両隊員の助けで夜遅くなんとかC6に帰還した。もう時間はない。その日の夕刻に上ってきた第二次攻撃隊の2名が川口、後藤の両隊員の看護に当たる一方アタック隊のサポートも行う。

翌日の午前2時、田中、尾崎両隊員がアタックに出る。睡眠は、2時間程度しか取れなかった。アタック隊は、その日の夕刻落日の直前マカルーの頂に立った。二人は、夜通し歩き続け、翌24日の明け方無事C6に戻った。BCは、第2次アタックの中止を決定、全キャンプに撤収を命じた。

実に劇的な結末であった。ところがである。世の中には、口さがない者がいるものである。彼等2人の行動が、余りにも超人的であったので、その登頂を疑う登山家が現れ出したのである

山は、登ったというから登ったのだと信じる以外にない。それ以上に信ずる手立ては、何もない。当然、田中、尾崎両隊員の言動を我々は、100%信じている。「何を馬鹿なことを言ってるんだ。我々は登ったんだ。だって、田中、尾崎がそう言っているんだから」である。それだけでいいのである。しかし、面白くないのも事実である。

ところが、東海支部隊の登頂を証明してくれた者が現れたのである。それは、翌年マカルーの西稜を初登攀したフランス隊のサミッターが田中、尾崎両隊員が頂上にアイスバイルに結んで打ち込んだ日の丸を見つけたのである。しかもそれを抜いて下山し後日、日本に届けてくれたのである。このことによって、うるさ方の山屋も黙ってしまった。

この顛末が後年、美談として小学校高学年の教科書の教材として取り上げられた。「マカルーの旗」と題してである。ところがこの一頂上の日章旗一頂これでお終いなのではない。まだ続きがある。

この教科書に掲載後、確か中国地方の小学校

だと記憶しているが、その小学校の先生から一通の手紙が私の手元に届いた。

その内容は、「素晴らしい美談である、しかし、日の丸が本当にマカルーの頂上にあったと誰が証明できるのか。フランス隊も嘘をついているのではないか。という疑問が子供達から発せられている」というのである。

田中、尾崎両隊員が、もう少し頂上は先にあったが、ここを頂上にしようといって、日の丸を打ち込んできたのかも知れない。それを見つけたフランス隊もここを頂上にしておこうと日の丸を持ち返って来たのかも知れない。という推論も成り立つというのであろう。成る程そういう見方もあるのか。

私の返信である。「登山家は、嘘をつかない。誰も観客は、いない。審判員もいない。だから嘘やごまかしは、通じないし、あり得ない。田

中、尾崎の両名が登ったと言っているのもそれで充分。更にフランス隊も登ったと言っている。それ以外にない。と申し上げても疑問は疑問とおっしゃるであろう。

でしたら翌年のフランス隊の登頂日は幸いにも快晴であった。頂上に立った隊員は360度頂上からの情景をカメラに収めている。そのデータを周りの景色と比較して、解析すれば、いとも簡単に撮影した高さ、場所が同定される。その旨、フランス山岳会に問い合わせる証明してもらって下さい」である。それ以後であるが、私の返事に対する小学生からの問い合わせは、来なかった。

東海支部隊である。田中、尾崎両隊員が頂上に立ったのは、日没直前でフィルムが凍り付き頂上での写真撮影が、不可能であった。頂上の写真は、一枚もない。 おわり

東海支部俳壇

夏日高に遊ぶ

山蕩児心酔

夏の霧熊くまよけラツパ吹き鳴らし

北海道の熊ヒクマは、おそろしい。毎年のように登山者が襲われ食われている。

陸梁りくりようの溪収まりて青嵐

陸梁りくりよう・荒れくるうさま。濁流と化した沢。三日待ってやつと減水。

瀬に踊る岩魚の口端蛾の白き

トラックの荷台にまぶし大西日

林道を下山。うんざりして歩いていると、乗ってけ。

雲海の遙か遠くに戸蔭別とつたべつ

現われしコロボツクルに夏の雨

アイヌの伝説の小人コロボツクルが、山麓の大きな葉っぱを傘にして現れそう。

戯れの岩魚入れ食い北の沢

道の無い沢を遡上、途中の休憩時に糸を垂れてみた。

雪溪ゆきへいに熊くまの影や七ツ沼

君恋ふる晴れて添いたや二輪草

豊橋市・立岩に遊ぶ七句

西山秀夫

春浅し峨峨たる岩を攀ぢにけり

垂直の壁見上げれば春の空

クライマーの肩に舞ひ落つ春の雪

蝶々てかてかが舞ふごとひらりと壁を攀づ

風花が舞ふ立岩の二月かな

手をこすり挑む岩壁余寒かな

冴へ返る森に笹鳴ひとしきり

笹鳴き・鶯も寒い間はチエチエと鳴く

膝痛でリハビリ中につき

玄関のまだ出番なきスキー板

干支に因んで鳥の山名の山へ

人日や津具の白鳥山登る

赤石の連山なべて雪冠る



支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画(平成29年5月～9月分)

- 5月6日(土) 鈴鹿の霊仙山(1,084m)
 ☆ リーダー: 磯部 隆 締切: 4月11日
- 5月21日(日) 鈴鹿の藤原岳(1,140m)
 ☆ リーダー: 今津英一朗 締切: 4月30日
-
- 6月3日(水) 飛騨高地の 初糠山(1,744m)
 ☆☆ リーダー: 伊藤康信 締切: 5月14日
- 6月10、11日(土、日)
 木曾山城の御嶽山(3,067m)
 ☆☆ リーダー: 村瀬恭平 締切: 5月20日
- 6月17日(土) 養老の養老山(859m)
 ☆ リーダー: 田中 進 締切: 5月28日
- 6月18日(日) 鈴鹿の御在所岳(1,212m)
 ☆☆ リーダー: 高松信治 締切: 5月29日
-
- 7月1日(土) 阿寺山地の白草山(1,641m)
 ☆ リーダー: 金谷正起 締切: 6月12日
- 7月8日(土) 越美山地の荒島岳(1,523m)
 ☆☆ リーダー: 村瀬 恭平 締切: 6月20日
- 7月15日(土) 北アルプスの乗鞍岳(3,026m)
 ☆ リーダー: 尾上 昇 締切: 6月27日
- <夏山>7月22日(土)～23日(日)
 八ヶ岳の赤岳(2,899m)
 ☆☆ リーダー: 磯部 隆 締切: 7月2日
-
- <夏山>8月5日(土)～6日(日)
 御岳の御嶽山、摩利支天(2959.5m)
 ☆☆ リーダー: 今津英一朗 締切: 7月16日
- <夏山>8月11(金)～13日(日)
 南アルプスの仙丈ヶ岳(3,033m)
 ☆☆☆ リーダー: 高松信治 締切: 7月14日
- <夏山>8月19(土)～20日(日)
 頸城山塊の雨飾山(1,963m)
 ☆☆ リーダー: 村瀬恭平 締切: 7月30日
-
- <夏山>9月1日(金)～3日(日)
 北アルプスの蝶ヶ岳(2,664.3m)
 ☆ リーダー: 尾上 昇 締切: 8月10日
- <夏山>9月2日(土)～3日(日)
 中央アルプスの空木岳(2,864m)
 ☆☆ リーダー: 磯部 隆 締切: 8月14日
- <夏山>9月9日(土)～10日(日)
 北アルプスの焼岳(2,455m)
 ☆☆ リーダー: 金谷正起 締切: 8月19日

次回支部友ミーティング 開催内容のお知らせ

- ① 第23回「最新の登山グッズ」
4月11日(火)19:00～ 支部ルーム
講師: 千葉泰丈氏(駅前アルプス社長)
- ② 第24回「2017夏山への誘い」
6月13日(火)19:00～ 支部ルーム
講師: 各夏山リーダー
- ③ 第25回「地図の読み方」
8月8日(火)19:00～ 支部ルーム
講師: 今津英一朗氏、高松信治氏

支部友会員数

平成29年3月現在/54名

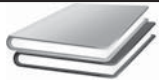
リーダー連絡先

- 村瀬恭平** 携帯: 090-4186-9876
 メール: hoshizakari@ezweb.ne.jp
- 川北一博** 携帯 090-3956-4123
 メール: kawakitakazuhiro@outlook.com
- 伊藤康信** 携帯: 090-2577-8137
 メール: kobitokaba@mediacat.ne.jp
- 磯部 隆** 携帯: 090-9180-7245
 メール: takass@yk.commufa.jp
- 今津英一朗** 携帯 090-2616-7549
 メール: imazu.eiitirou@maroon.plala.or.jp
- 金谷正起** 携帯: 090-9931-3600
 メール: kanaya.masaki@rouge.plala.or.jp
- 田中 進** 携帯: 090-9191-8666
 メール: t-susumu@peace.ocn.ne.jp
- 高松信治** 携帯: 090-3156-5268
 メール: takama2nobu3@yk.commufa.jp
- 尾上 昇** FAX: 052-832-3878
 メール: onoe@onoe.co.jp

山行対象者 支部友会員及び支部会員

申込み方法

- ・支部友会員は申込締切日までに、各山行リーダーが示す方法で申し込む。
- ・締切日 原則山行日20日前まで。(締切日を過ぎている参加空き情報はリーダーに直接問い合わせ下さい)
- ・支部会員は申し込み締切日の翌日以降に、各山行のリーダーへ問い合わせる。
- ・山行の募集人員を超えない範囲で、支部会員の参加申し込みを受け付ける。



東海支部の蔵書からの一冊⑪

図書委員会委員長 石田文男

『日本の名山16〈甲斐駒ヶ岳〉』

20代半ば、数人で残雪期(4月末～)に戸台川上流域の山々を目指したことがあり、丹溪山荘下手の天幕場を拠点として鋸岳第2高点(途中まで)、仙丈岳薮沢、甲斐駒、大仙丈沢の各ルートに満喫できたものだった。

目指す甲斐駒へはヘッドライトの一条の灯りに集中し樹林帯を登っていくと、白み始めた北沢峠に着いた。稜線に取り付いてカチカチの雪稜とガラガラの岩混じりを何度もやり過ごし、駒津峰を越えると念願の甲斐駒を踏んだ。四囲の数多の山と仙丈の端麗な白稜の眺めは、いまだ昨日のようである。

次の日、ふたたびライトの灯りの下、北沢峠を越え仙丈岳南面の大仙丈沢を目指して野呂川のスーパー林道を下っていった。ウェストンが登っている大仙丈沢の取り付きに立つと、紺碧の空に白い円弧を描いている仙丈の頂は指呼にあった。

《アルピニズムの行為にはさまざまな技術が要求されるのだが、我が国には欧州アルプスのように氷河や氷のクローワールが無いので、氷の登攀は体験できない。強いて求める事によって・・・中略。甲斐駒ヶ岳の黄蓮谷を冬登る事は、氷だけを求めるだけの・・・中略・・・氷の登攀は、欧州ならば夏でも求められるのだが、日本では水流の凍結を待って冬登らなければならない。・・・中略・・・だが、理屈はぬきにして、青い氷にピッケルをふるい、自分の意思によってルートを開くことは、アルピニストの芸術的喜びではないだろうか。・・・中略・・・千丈滝は前にきたときとうって変って、厚さも計り知れない青い氷が一面に張りつめていた。私は感激し、ピッケルを振ってステップを・・・中略・・・打ち込むたびに氷片はうなって落ちていく》。これは「厳冬期甲斐駒が岳黄蓮谷左俣」(古川純一)の一節だが、読み手を引きずり込み、この一篇を通読させる。

甲斐駒には登攀し得る大岩壁と谷がたくさんあり、摩利支天をめぐる数々のルート、厳



冬期を頂点とした黄蓮谷登攀など登山史に残る数多の記録が打ち立てられている。これらに登攀、積雪の谷などを目指す若い人たちには、単なるガイドブックには無い、その筆者の思いが伝わってくるものとして、是非読んで欲しい一本である。

勿論、このシリーズ全巻にわたっても興味深いものばかりが網羅されているのは言うまでもない。

支部報No146掲載と重複するがもう一つ『白山』を挙げたい。20代後半から積雪期の奥美濃の山を登り始めて、徳山を巡る蕎麦粒山、五蛇池山から時計回りに烏帽子、黒壁山、三周ヶ岳、美濃又丸、金草山、冠山、若丸山、磯倉、能郷白山・・・の山頂を踏んだ。そのどれもが、たっぷりのラッセルだったり、あるいはアイゼンを軋ませての碧い空に突き上げる尾根だっぴりの楽しい登行ばかりだった。そしてこれらの頂から見える北の白い山への憧れは必然的だったし、白山の南、石徹白を取り巻く真っ白い山なみを辿り、さらに白山北方へと連なる峰々に足が向いたのも当然の成り行きだった。だから、私にとって白山は一入なのである。

この『白山』には本峰を取り巻く山々の魅力的なルートがいくつも載っている。「尾上郷川と中ノ川」(桑原武夫)、「別山尾根か

ら三方崩山」(京念孜)、「白山・境川流域の沢」(大阪わらじの会)など。境川は笈ヶ岳、大笠山・・・の稜線に突き上げる険しい谷ばかりで、「全体にわたる廊下はへつり、直登、水泳、大岩壁と大滝、そしてゴリュジュ帯の流域」と言われていて興味深いものがある。勿論、他の章も読み応えのあるものばかりである。

1997年11月15日発行 頁251

図書委員 石田文男

『日本の名山9〈槍ヶ岳〉』

私が初めて槍ヶ岳に登ったのは支部友に入会した年で、槍ヶ岳に関する知識は殆んど持ち合わせていなかった。だが、知識はなくても苦労しながら登った槍ヶ岳は素晴らしいものだった。緊張した岩場を経て立った狭い天辺からの展望など、素晴らしい体験や感動があったからこそ今も山登りを楽しく続けます。

深田久弥が《「登山」に興味を持ち始めた人で、まず槍ヶ岳の頂上に立ってみたいと願望を抱かない者はいないだろう。そのピラミダルな山にふさわしく、槍ヶ岳は四方に尾根と沢を伸ばしている。尾根は東鎌、西鎌、槍穂高、北鎌の四稜。沢は槍沢、飛驒沢、千丈沢、天丈沢の四沢である》と、表現しています。この本でも、それらのルートから槍ヶ岳を目指した体験記が興味深く紹介されています。

また、新田次郎の『槍ヶ岳開山』には一本の槍のように頂上が鋭く尖った槍ヶ岳に、日本史上で初めて案内人・中田重郎と共に登頂して開山した播隆(ばんりゅう)上人の信仰と葛藤の挑戦が書かれています。

『風雪のビバーク』では、松涛明が1949年1月に槍ヶ岳北鎌尾根でパートナーだった有元克己と共に遭難した際に、死の直前まで書き続けた記録の紹介があり、読む者を感動させます。

また、「喜作新道・欲の道」では著者の山下茂実が、上條嘉門次亡き後上高地の主と言われた猟師の常さんこと内野常次郎を喜作と対比させて、《無欲の常さんに対してがめつい喜作・・・しかし生存中、強欲だ、守銭奴だと言われていた喜作が誰よりも気前良く

素敵な道を私達にプレゼントしてくれました》、と書いており興味をそそられます。

最後になりますが、この本を読んでもう一度槍ヶ岳に登ってみたいくなりました。

1997年2月15日発行 頁267

読図会員 森本真由美

このシリーズ全巻の巻末には「参考文献」と「執筆者プロフィール」が付されており、それぞれの生没年、山歴、代表著作を知る事ができるのはありがたいことだ。

本に接するたび、「いつの時も本に親しみ、それが自分の山登りの糧になれば・・・」山登りが何倍も楽しくなることかと思う。

この1年、支部蔵書として紹介できたのは『日本の名山』シリーズのうち次の12巻である。支部報・No146:『①御嶽山』、『⑧白山』、『⑦剣岳』。・No147:『⑧立山』、『⑩北岳』、『富士山part 2』。・No148:『⑩穂高岳』、『⑫八ヶ岳』、『富士山part 1』、『白馬岳』。・No149:『⑨槍ヶ岳』、『⑩甲斐駒ヶ岳』。

ちなみに、このシリーズ全巻を挙げておく。

『①大雪山』、『②岩手山』、『③月山』、『④谷川岳』、『⑤浅間山』、『⑬富士山part 3』、『⑬大山』、『⑭阿蘇山』。別冊『①丹沢』、『②高尾山』、『③筑波山』、『④雲取山』

串田孫一・今井通子・今福龍太編

20巻+別巻 46判変形

46判変形 発行:博品社

個人山行もJAC東海登山届けを!



専用携帯電話(担当 山田明美)

080-2632-3776

東海岳人列伝(5-2)

～中部山岳界の名伯楽としての跡部昌三～

編集委員会 西山秀夫

跡部昌三の真骨頂は中央アルプスにあったことは前述した。当時の「岳人」は中部日本新聞社で発刊。NO101(昭和31年9月号)を読むと、編集人は伊藤洋平という貴重なバックナンバーだ。名古屋山岳会の会員も執筆して会挙げて発行に協力していることがわかる。巻頭の写真は跡部昌三、前園洋太郎、大和幹夫らに混じって関一や木曾駒之助があることだ。

故中世古隆司氏と跡部昌三談義になった時、「岳人」の一部を任されていたらしい。跡部ばかりではまずいのでペンネームを使ったとのことだった。

関一二は須原駅へ夜行できて夜通し歩き、途中でビバーク。今朝沢から南駒ヶ岳に登り、播鉢窪で泊まり、翌日は越百山から飯田松川へ下る紀行を書いた。この韋駄天ぶりは跡部さんだろう。

木曾駒之助は「木曾谷と伊那谷は手を握れ～不遇になく木曾駒」というエッセイを書いた。要旨は伊那谷にも分があるのになぜ、木曾を付けるのか、木曾山脈だから木曾を冠してなぜいけないのか、また、伊那谷では駒ヶ岳が甲斐と木曾にあってややこしいから西駒ヶ岳、東駒ヶ岳と区別する。中央アルプスという名称もちと大袈裟だ、と散々苦言を挙げた上で、「自分のところだけの縄張り根性をすてて、中央アルプスを大乘の見地から見直す必要がある。木曾谷もまず団結し、伊那谷と話し合っ中央アルプスの総合的開発を検討」せよと迫る。「もっと多くの人に登られてよい山という意味からあえて地元の関係者に憎まれ口を叩いた」という。

地形的に伊那と木曾が頻りに親密に交流することは無理だった。歴史的、文化的に住んでいる世界が違う。しかし、それでは木曾駒が可哀そうだというのだ。

木曾駒を主語にする地元への苦言。この文脈から類推すると明らかに跡部昌三の執筆と思われた。木曾駒を生涯愛した跡部昌三らしさを感じる。

鈴鹿の山への想いを綴るエッセイも素敵で

ある。

○昭和25年10月号「岳人」No30 P22 「鈴鹿の山」の全文再録

1

遠い祖先からの生活にしみこみ、共に明け暮れしてきた西の山。濃尾平野の彼方に西の山が現われて天気は上がり、隠されて雨となり、雪が懸かって襟を合わせ、雪が消えて春を向かえ、日々の暮らしに間近に見てきた西の山の連なりこそ鈴鹿山脈である。

この山脈は関東と関西を振り分ける一つの目標であると言われてきた。またこの峠越えは古くは間道として旅する人を悩まし、難所とうたわれていたし、東西定期航空路のあった頃はエア・ポケットとしてもよく知られていたところである。

2

白山火山脈が南下して関ヶ原で一旦くびれ、再び霊仙山を起こして始まり、南へ岐阜と滋賀の県境から、更に三重と滋賀との境に移り、標高千米を上下しつつ南部では次第に高度を落とし、鈴鹿峠に至って終わる七十五kmに及ぶ連峰が鈴鹿山脈であって、その頂上部には褶曲を受けた古生層を切っ成る平坦がカルスト地形をなし、周囲には殆ど断崖層を持つ完全な地塁である。

この山脈の特徴としては伊勢側の東面断崖層は急峻なのに対し、西面の近江側は緩傾斜をもって琵琶湖盆地にのびている。

ここを水上にもつ谷川、近江側にあつては犬上川、愛知川、野洲川となつて琵琶湖に流れ、伊勢側は町屋川、朝明川、三滝川となつて伊勢湾にそそぐ。

3

登山する立場からこの山脈を藤原岳以北、御池岳、霊仙山、などを北部、鎌ヶ岳以南を南部といい、鎌ヶ岳以北、藤原岳までの竜ヶ岳、釈迦ヶ岳、雨乞岳、御在所岳などを含む一帯を、私達は一口に中部鈴鹿と簡単にいつている。

中部鈴鹿では雨乞岳(1238m)が最高であり、次は御在所岳(1208.7m)で1等三角点がある。

これらの山頂附近は笹や木は矮小となり、カルスト地形のゆるい起伏の高原状で、廣濶な展望の及ぼすところ琵琶湖は絵画でも見るように光り、伊勢平野と伊勢の海は箱庭のように広がっている。

よく晴れた空気の澄んだ日には御岳、乗鞍岳、中央アルプスの山々が見え、もし早春で遠望のきく日であったなら、白山から北アルプス、南アルプスの南部、その左に富士山までも望見することが出来る。

山腹は一部檜、杉などの植林が見られるが、大部分は薪炭林である雑木が鬱蒼としげり、その下を道が細々と続き、水は深い緑をくぐり、緩やかに右、左と縫いながら流れている。

だが伊勢側の登路は急であり朝明川や三滝川の各支流は必然的に滝も多く、それに反して近江側の地勢緩慢から谷も滝といえるものはまったく少ない。

4

中部鈴鹿の山々へは交通の便も悪くなく、三重交通の湯ノ山線やバスがあり、山懐には冷泉であるが湯ノ山温泉があって街の人達を多く迎えているが、その上の一の谷には近鉄山の家があって管理人が常住しているし湯ノ山温泉を出外れた大石橋の上手に、湯ノ山山荘が登山者向きに開放されているのと、谷北には大分荒れてきたが中部岳連の管理する北谷小屋もあってこの方面の登山の中心となっている。

一般的にみて、鈴鹿には登山道といえるものはまことに少ないが釈迦ヶ岳、御在所岳、鎌ヶ岳などには登山者のための登山道もあり、また嘗て私達のグループによって、御在所岳の岩場として開拓されてきた藤内壁も次第に認識されて、次の時代を担う若い人達のよいゲレンデもあり、山と谷を繞(めぐ)って登山の変化と興味もまたこの方面に多い。

5

ここを舞台に国体登山はA、B、Cの三つのコースが、主な山と谷に各々がもつ鈴鹿のよさをとりいれて選ばれている。各コースとも鈴鹿の中心部をなしている愛知川源流がはいっているが、ここは近江側でもあり国境線に平行しているため落差が少なく、唯一の天狗滝も5米ほどで滝というより寧ろ淵を取り上げなくてはならぬほどである。水は飽く

まで美しく、淀んでは淵となり、流れては瀬となり、岩壁を洗い、花崗岩を白く磨き緑を鎔(溶)かして行く。

新緑の鈴鹿は水水しく澗刺としているが、秋すれば満山紅と黄の錦によって彩られ、人もまたそれに染まりはしないかと思うほどの恍惚境を現出する。

6

鈴鹿の山は炭焼を除いては考えられない。途絶えがちの道の傍らにも竈(かま)の跡が点々とあり、今煙を揚げているものもある。現在では伏木谷方面と、愛知川水晶谷、クラシ谷附近で焼いているが、働いている人は殆ど伊勢側の千種村の人達である。

山へ登るにも炭焼道が多く利用されているし、また小屋は羽根を休める憩いの場として、或いは簡単な埒(ねぐら、とや)として私達には馴染み深いものである。

一部を除いて登山道としては手入れされず、雑草やすす竹がおい繁るにまかせているが炭焼が始まると道が復活したり、新しく出来て楽をするが、元々登山道でないからうっかりつり込まれて馬鹿を見ることもある。仕事が終わればいつの間にか小屋は潰れ、道にはまた草の時代がくる。

7

鈴鹿の山はたかが千米程の藪山に過ぎず、そうむきになって登る山ではない。心静かに山を楽しむところであり、闘ったかつて登攀を振り返ってみて、そっと山に話しかけてみるところである。沢をただ草鞋の感触に耳をかたむけ、藪を漕いで山頂に立つと、折柄の斜陽がやわらかく草々をなで、そよ吹く風に紫煙がたゆたに流れるとき、また谷間に夕暮れが漂うころ、馴染みの炭焼小屋の戸を押して小屋の主人と久し振りに積もる話を夜更けるのも知らずに話し込むとき、本当に鈴鹿のよさをしみじみと感ずる時である。

愛大生薬師遭難に寄せる

昭和38年1月の愛知大学生13名の薬師岳遭難にも東海銀行山岳部部報に寄稿された。東海銀行山岳部「さすらい」2号(昭和38年)の寄稿から抄録。

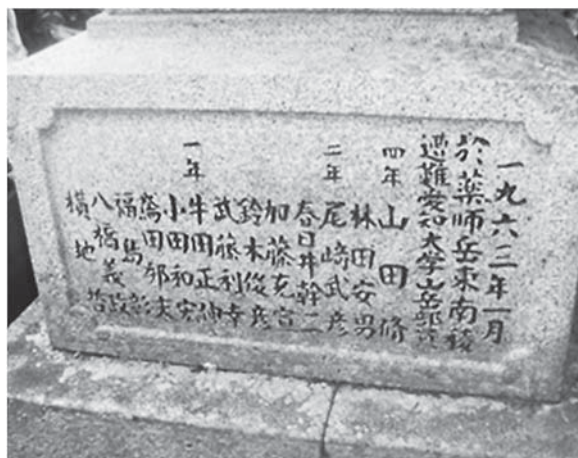
「悪天候は人を死地に追い込むためにあるのではないということである。厳冬1月も寒冷さ、風雪の狂う高所では、人の生存を拒否し



東海銀行山岳部の「さすらい」2号の表紙
 大正13年3月に名古屋の伊藤孝一らは積雪期における初登山をしている。
 昭和38年1月の薬師岳は豪雪の年だった。

ているようであるがそこへ登ろうとするものは、それがどのようなものかは、すでに分かっているはずである。また、それに立ち向かう自由と、さける自由は登山者自身に許されている」

「その五体を安全に守ってくれるのが、山の常識であり、山の技術である。知識だけではなく、ことにのぞんで反射的に行使されるまでに身につけていなくてはならない。それは何も高度な技術を要求していない。要するに山での危険というものは、山にあるのではなくて登山者自身にのうちにあり、ということ、はっきり知っておくことである。」



富山県大山町折立の薬師岳登山口にある愛知大学薬師岳遭難碑には遭難した学生の氏名が彫り込まれている。



赤牛岳の手前あたりから眺めた薬師岳東南稜の全貌。登山道のある稜線を隠すほど雄大な支稜で薬師沢と黒部川本流出合付近に落ち込んでいる。

実践と知見に裏付けられた経験豊かな登山指導者・跡部昌三の面目躍如たる名文である。非情な自然に向った未熟な13名の悲劇を他山の石として支部員は頭の片隅に置いて熟読玩味していただきたい。

山に明け暮れて1992年85歳で死去された。

参考文献

『愛知県山岳連盟』60年史

『名古屋山岳会会史』

「岳人」、「山」、「さすらい」への寄稿文など多数。



折立に建つ遭難碑。
 十三重の塔（とみえのとう）

新刊紹介 『絵本 わが山の日々ー山道も下山に入ってー』

安藤忠夫著

小川 務

山書の蒐集家として知られている安藤忠夫さんが『絵本 わが山の日々ー山道も下山に入ってー』を刊行された。酒の席で、紹介文を書くようにと著者と大先輩の杉田 博支部員から話があり、気安く引き受けたが、実物を見、読み進むうちに、引き受けたことを後悔した。

これまで見たこともない装丁の本であり、過去50年にわたって描いてきた水彩画とイラスト合わせて約600枚を205ページに惜しげもなくふんだんにちりばめた特装本で、今までのように、文章をほめたり、けなしたりして太刀打ちできる代物ではなかったからだ。

この本は横長B5番で麻衣色のクロス張りの表紙に黒字のタイトルと著者の山荘から見える北アルプスの山々が打ち込まれている。

一般的にこのような本の弱点は、紙の短い一辺で製本することとなり、背固めできる部分が普通の本の約三分の二になって、変形しやすいと言われている。さらに、書架に並べると、この本だけが出っ張り、おさまりが悪い。この弱点をカバーするために、筒形美装ケースに入れて、縦長の本と同じように書架に並べられるように工夫、洒落た装丁の本として出来上がっている。考えてみれば、製本工房「梓」を立ち上げ、本づくりの技術を磨いてきた著者にしてできることなのである。

さて、表紙の山々は、爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、五竜岳、白馬岳と連なる山並みで、著者の山荘から見渡せる景色である。

本書はこの山並みを北から南へと、山登りに明け暮れた日々を、美しい水彩の絵画と楽しい、ある時は雪山単独行なるが故のハラハラドキドキの文章で語っていく。

中頃には、一気に読み続けてきた読者のために、肩の凝らない登山の周辺の話などが用意されている。特にピッケルの話は圧巻である。著者はウッドシャフトのシモンやウィリッシュを愛用し、日本製では山の内、門田、森谷、二村を所持している。私も作業小屋の片隅に置かれた仙台山内東一作一八六三と刻印されたピッケルを目の当たりにし、息をの



んだ。

続いて、安曇野に現在の山荘を建設するに至った顛末。野山のキジやヤマドリ、各地の山中で出会ったツキノワグマ、ヒグマ、ヒマラヤ・グマ、目の前に落ちてきたイノシシなど興味深い話が続く。

一息ついた後の後半は、餓鬼岳から始まり、残雪の燕岳、遭難寸前だった槍ヶ岳の北鎌尾根。20～40歳中頃まで季節を問わず通い詰めた穂高の山々。御嶽山と白山については、威厳あふれる父のような御嶽山。いつも寄り添うように視てくれた慈愛あふれる母のような白山、と書き示している。

さらに、白山の北の稜線上にある笈ヶ岳については、一時期、春の訪れを待ちわびて、せっせと通い詰めた山であり、穂高、劔に劣らない存在感のある山と紹介している。

最後の編集覚書で著者は絵を始めたのは登山と同じころ、20歳少し前からで、途中の15年間は絵筆を持つことなく山登りに集中し、定年の10数年前から再び絵心が戻ってきたが、画集とするには自信がなく、画文集にしたと言っている。

紹介者として、何回も読ませていただいたが、この本の中には、過去の登山を回想し懐かしむだけの文章や絵画は一枚もなく、常に現役で山々に挑む著者がおり、ともに感動し、楽しませていただいた。今回の刊行を心から祝福したい。

委員会報告

【技術向上委員会】

「中・高年安全登山指導者伝達講習会」を支部ルームで開きました！

昨秋、技術向上委員会では、「国立登山研修所」と「日本山岳協会」が主催する「平成28年度中・高年安全登山指導者講習会」に委員を派遣しております。

中・高年登山者が増加し、それに伴う様々な問題が浮き彫りになっている昨今ですが、講習会の知識・技術を東海支部内で有効に活用して頂くため、「伝達講習会」を1月26日にルームで開催しました。鈴木慎吾講師からの報告は参加者に分かりやすく噛み砕かれた内容で好評でした。

最初の読図ナビゲーションテストはこの地図上のポイントが「山か？谷か？」という単純なものです。参加者の正解率は非常に低いものでした。これらの教材に興味ある人は是非挑戦してみてください。

3日間の講習会を2時間程に凝縮して伝達してもらっており、ここに多くを記することが出来ませんが、村越真教授「読図とナビゲーション」と北村憲彦教授「中・高年登山の課題について」の講義資料から下記部分を抜粋しましたのでご参照ください。

●「読図とナビゲーション」から

(いざという時に備えて)

- 登山計画書の提出
- 遭難保険への加入
- エマージェンシーキットの常備（ヘッドランプ、サバイバルシートなど）

(道に迷ったなど思った時に)

- ① 地図をじっくり見直し、想定した場所がないことを確認する。
- ② 周囲に目印となる特徴がないかを探す。そのために危険のない範囲で視界が開けた場所に移動し、現在地を再把握する。
- ③ 戻る道を覚えているなら、分かっている場所まで引き返す。
- ④ 以上の方法が使えない時、携帯電話等通信手段があるなら利用して救助要請する。山では電池の消耗が早いので不要時には電源をオフに。圏外になる場所も多いので、いつも使える訳でない点に注意。

⑤ 体力を温存するために、目立つ場所で救助を待つ。

●「中・高年登山の課題について」

(研究協議での自由討議から)

- 体力や技量
 - A メンバーの体力差やレベルの差が悩みの種。
 - B 無理な人には気の毒だが諦めてもらう。
 - C 久しぶりに参加した人の出たところ勝負は迷惑。
 - 中高年の意識
 - A プライドが邪魔して、「知らない」が言えない。
 - B 人生経験が長いから知った気になっている。
- (万一の時の対処の仕方 雨の場合 必要なコトモノ：観察+保温+引返し)**
- ① 雨が降りそうなら、行くかどうか十分考えること。
 - ② 雨が降りそうなら、いつでも引き返すこと。
 - ③ 雨が降って、風がでてきたら小屋で待つこと。
 - ④ 雨ガッパ(上下)は体温を保つのに役立ちます。
 - ⑤ ツェルトやシートを使って、雨宿りしよう。
- 以上

【登山教室委員会】

1. 2登山教室の運営

本年も中日、朝日の2教室を開催しました。若干受講者が減少気味ですが、天候に恵まれ、ほぼ計画通りに実施しました。

2. 指導員研修の実施

今年初めて指導員の各種登山技術向上と体力強化、指導員相互の意思疎通をはかる、ことを目的に年間計画に従い実施しました。

- ①ファストエイド②レスキュー③岩稜登攀④道迷い学習(机上、現地)⑤沢登り⑥長時間歩行⑦幕営縦走(中止)⑧技術向上委員会開催の各講演参加(3回)など、多岐に亘って研修を実施しました。

天野俣明

【青年部】

タイクライミング山行

2016年12月30日から2017年1月4日までタイヘクライミングバカンス旅行に会のメンバー9名で行ってまいりました。

メンバーは原口、梶浦、浅野夫婦、吉川夫婦、田島、荒木、長谷川の9名。

韓国インチョン経由便で乗換8時間、時間を潰す為鍾乳洞へ、鍾乳洞が見ものではなくそのLED照明がメイン。そして、よくわからないキャラクターをバックに写真撮影。慰安婦像などもあり日本人へ攻撃的なツアーであった。とにかく寒い。

タイ到着。暑いが気分がのる！空港から2時間車で移動してアオナンビーチへ向かう。アオナンビーチからトンサイのホテルまでは船。乗り込む前に4人で濡れながら船を押す作業もあり。ホテルはなかなかキレイでベッドメイキングも毎日あり。シャワーの出はゆるい。Wi-Fiはある。



チェックイン後さっそくクライミング。石灰岩らしいガバやポケットやコルネが多い岩場は多い。ほとんどが薄かぶり。そしてまずタイに着いてから初飲みを昼から開始。夜も飲む飲む飲む、日本の夏より過ごしやすい。そして寝る。

2日目

ホテルから一番近いエリアで登る。クライマーも多く登っている人は男性は全員上裸、女性は水着に近い格好が主。男性陣はみな正直クライミングどころではない。はみチクネーちゃんが目に飛び込んでくる。サングラスが役に立つ。2日目の夜からは、このエリア



に来てい

るクライマーには大人気の安くて美味しい『mamas kitchen』9人で十分食べて3000円程度、ただビールは別な店で買う必要があります。

3日目

クライミングモチ高めチーム(クラチーム)バカンスモチ高めチーム(バカチーム)ときれいに分かれる。クラチームは朝早めにまた別な岩場へ向かい登って楽しんでた模様。



バカチームはというと、カヤックに乗り離れ小島へ。やっぱりやってみたくて考えていた『ディープウォーターソロ』。そこでグレードやルート名など気にせず楽しんで

いた我等チームはカヤックで適当に登りたい所に取付きジャポーン！ジャポーン！！スマホもジャポーン！？その後はビーチであらゆる対象物をおかずにしながらビール&ランチ。

それからは、みんなと合流して昨日クラチームが登ったエリアでみんなでクライミング。私はふざけて取り付いたルートにマジにシフトせざるをえず真面目に登るはめになる。そしてまた夜はママズで飯食って就寝。

4日目最終日

朝一で各々最後のクライミング。昨日終わらなかったルートをやりに行き回収してくる者や、時間がないのにマルチに取付き渋滞にハマり途中懸垂敗退する者もいて、各々楽しんだ。

それからアオナンに船で行き昼からチャーター便が来る21時まで時間を潰す事に。浅野さんがいい店があると40分弱坂道を登り、そしてそこが定休日である事を確認し、若干もどって荷物を置かせてもらえるレストランを見つけ、昼を食べてからみんなバラバラに行動。以外といい時間。それからは、帰国ルート。

今回のタイの旅、浅野夫婦には大変お世話になりました。飛行機やホテルの予約から、現地

の流れまで、みんな浅野夫婦をガイドさんと間違えているのではないかという感じ。かくゆう私も。すごく感謝しています。ありがとうございます。

私も団体での海外旅行は初めてで、私の性格的に大丈夫かと心配ではありましたが、そこまで気を使って疲れる事もなく過ごせたのは今回のメンバーが良かったのではないかと思います。あとずっと酒が入っている状態であったのも助けになりました。クライミングはおまけのバカンス旅行といった感じで力を入れずに挑んだのが良かった。みなさんありがとうございました。

ちなみに今回クライミングしたエリアは以下の場所です。ルート名やエリア名は覚えてません。どれも面白い場所でした。

みんなも入ろう！山岳会。

長谷川 徹

台湾一周自転車旅

2016年12月23日～2017年1月1日の計10日間で台湾を自転車で一周してきましたのでご報告します。



ルートは台北を出発し、反時計回りに蘇澳～花蓮～台東～墾丁～高雄～布袋～台中を経由して台北へ戻るよう取りました。距離にすると1,100kmくらいだと思います。

海外を自転車で走るのは初めての試みでしたので「言語」や「食べ物」、「野犬」など不安要素がありました。「言語」は身振り手振りで、「食べ物」はビールの力で解消することができましたが、「野犬」という要素は旅の最後まで解消することができませんでした。台湾ですが、田舎になるほど野犬が多く生息しています。テリトリーに入ると彼らは問答無用で襲

かかってきます。夜間走行中に黒い犬の集団に襲いかかられたことはトラウマものです。

今回は短い期間でしたが、多くのことを経験できたと思います。やはり知らない場所へ行くことは楽しい。次はどこへ行こうか、何をやろうか。

栗本慎平

【ボランティア委員会】

昨年、ボランティア委員会の定例行事として「ひまわり山行」を始めました。

現在、東海支部員で、視覚障がいの方が5名いらっしゃいます。委員会の行事としては、以前から、年2回のブラインド登山を行ってききましたが、視覚障がいの方と、一緒に山に登る機会をもっとたくさんつくろうという事から始まりました。

すでに4回行っており、直近では1月29日(日)に、視覚障がい者の方3名、支援者8名で、鹿島山、大鈴山へ行って来ました。



大鈴山にて

来年度も、従来からの春、秋の二つのブラインド登山、ボランティア委員会の親睦山行に重ならない月で、年6回位予定しています。是非、一度参加してみてください。次回は、3月26日(日)宮指路岳を予定しています。

ボランティア委員会では、支援登山は、委員会以外の支部員、学生連盟のみ皆さんの力を借りて行っています。そのための組織として支援者グループを組織しており、70名近い方が登録されています。登録いただくと、行事のご案内をメールで差し上げています。支援者登録だけでも結構ですので、興味のある方はご連絡ください。

前田隆久

会 務 報 告

【2017年1月常務委員会】

日時：1月25日（水）19時00分～21時00分
1. 第5回夏山フェスタ（中部経済新聞）－開催準備の進捗状況の説明あり。開催日は平成29年6月17日（土）18日（日）の2日間で、場所はウインク愛知の7F・8Fの2フロアで行う。内容は展示会、各種セミナーイベントの構成で予定している。主催は、夏山フェスタ実行委員会・中部経済新聞社等で構成する。セミナーの講師にあたって決定しているのは、南谷真鈴さんと18日の午後、近藤健司さんは17日で時間は未定。その他に座談会形式で、村越真氏・宮崎氏・山本正嘉氏で安全登山について行う予定。又、山小屋放談会の計画を検討している。又、新商品紹介で山の隠れた機能を持つ様な新商品の紹介をするのも面白いと考えている。出店募集については、協賛企業としてJR 東海その他6社、又、メーカーとして25社、自治体として14自治体、観光旅行者として14社、山小屋として、26社の参加を見込んでいる。第1回から3回まで行っていた懸垂下降のアトラクションについても再度検討していく事にした。

2. 支部長挨拶（高橋）：次年度の体制づくりを検討する時期になった。各委員会の委員に若い人達を登用していく事で組織の活性化をお願いしていきたい。また、石原國利氏執筆の本の紹介と、杉田博さんが東京で卒寿記念の絵画展をする旨の紹介あり。また、財務の状況を良くしていく為にカレンダー等グッズの販売を行うことにしたいと考えている旨の報告があった。

3. 委員会報告

①支部友委員会（金谷）：12月の山行は4件の計画のうち2件、猿投山と各務原アルプスを実施した。1月の計画については、富士見台は参加者が少なく中止。2月の支部友ミーティングは「スマホを山で活用しよう」のテーマで鈴木慎吾氏が講師で行う。12月の加入は3名で現在60名。登山教室開講素案の説明がされて支部友としては全面的に協力をする事を確認した。

②猿投の森づくりの会（小川）：配布された資料を基に、わいがや講座、枯死死木伐倒、観察会などの活動報告並びに今後の予定を説明。

③会計（市川）：ユースの会の会員から会費を納めていただくようになったこと、支部のアイゼ

ン2足の売上代金の入金があった旨報告。

④岳連（市川）：日山協の名称が日本山岳スポーツクライミング協会となる事が決まった旨報告。雪山研修会が2月25日～26日に高鷲スノーパークでされること、愛知山岳マラソンが猿投山で3月4日に行う旨報告。年末から新年にかけて入山した愛知岳連の参加団体で2件事故があり、報告書が提出され質疑があった。

⑤亀の会（休み）：12月に忘年山行を29名の参加で、物見山から猿投温泉。1月26日に鳥見山を参加24名で予定しているむね書面で報告。

⑥山行委員会（鈴木）：リーダー会議を3月24日開催予定（新しく2名の参加を得て合計19名で開催予定。支部員や支部友会の方からもっと早く山行計画を知りたいという要望が多いので4月位から半年分の計画について提示できるようにしたい旨の報告があった。リーダー育成と確保については新しく2名入ったものの女性のリーダーがいないので取り組んでいく。山行の有り方として今後は事前ミーティングを開き、コース等細かいことを参加者全員で決めていく方式を増やすことにした。又、東海支部だよりを使った山行案内をもっとタイムリーにする必要があると意見が出たので、対応を検討することとなった。

⑦東海ユース（山田）：本日休みの為、資料のみの提出。

⑧自然保護委員会（南川）：2017年度の事業計画は、①自然観察研修会の候補地を提案すること。②自然保護全国集会是7月9日～10日とし岐阜支部担当にて「失われゆく高山植物」をテーマに伊吹山で行う。③猿投の森の動物調査について、カメラの定点調査により日本ジカの生態調査を実施することとする。第10回及び第11回猿投自然観察・調査山行－配布された資料を基に報告あり。

⑨支部報編集委員会（星）：4月1日発行予定の第149号の出す内容・原稿依頼者の説明があった。原稿締め切りは2月20日なのでそれまでに提出してほしいむね要請あり。又、日山協の新春懇談会で沖さんが第6回日本山岳グランプリを受賞したことを受け、東海支部として中京山岳会との共同受賞記念報告会・懇親会を開催したい旨提案あり－このことは、異議なしとの事で承認された。

⑩技術向上委員会（片岡）：1月26日午後19：

00 に、中・高年安全登山指導者講習会に鈴木慎吾氏に行き、戴いたその伝達講習会というところでむね報告あり。

⑬登山教室委員会(天野)：現在、中日・朝日の両教室で行っているが受講人数がじり貧で4月以降の開講も危ぶまれている。昨夏から始めている指導員の研修については、2月にラッセル講習会を予定(12名参加予定)。また、東海支部独自で登山学校を開く提案があり、登山教室委員会も全面的に協力の予定。

⑭ボランティア委員会(前田)：12月17日第3回ひまわり山行を7名の参加で綿向山を実施。今後の行事としては、①第4回ひまわり山行を1月29日鹿島山・大鈴山で、②第5回ひまわり山行を3月26日に予定。③春のブラインド登山は2月1日の福祉バス抽選結果をうけ準備を進める。④SON愛知・知的障害者支援登山は4月22日23日でSON愛知と調整中。⑤2月12日に委員会メンバー・支援登録メンバー・視覚障がい者との、冬の親睦山行を行います。⑥「スマホを山で活用しよう」講演会に、ボランティア委員会として参加を呼びかけています。

⑮写真展実行委員会(井上)：来年3月に市民ギャラリー栄で計画。今年度はその準備の為の撮影山行をしている。予定は2月16日17日に美ヶ原、参加者13名。3月24日25日に白馬に計画。

⑯デジタルメディア委員会(井上)：東海支部便りメール配信について現在第2号まで配信している。今度の3号と前の2号については今津さんが担当している。情報を収集・発信については総務に中心になって戴き、技術的な部分をデジタルメディア委員会で担っていきたいと考えている旨報告。

⑰総務委員会(毛利)：新年会は参加者合計98名(内講演会のみ5名、懇親会93名-内9名が学生)であった旨報告。各委員会の来年度の事業計画については2月末まで、28年度の事業報告は4月末迄に提出してほしい旨依頼があった。

⑱登山学校開講講案(尾上)：登山教室は本来東海支部自身が自主運営すべきもので公益社団法人による公益事業実施の責務でもあるといえるところから登山技術や高度な山行を指導する人材育成も目的の一つとしてメディアにだけに任せない独自の登山学校の開設を提案した。目的は①末組織登山者への安全登山の啓蒙と指導。②JAC会員の入会促進③東海支部の

人材育成。とし、教室のグレードは3段階に分け「初めての山登り教室」山登り再チャレンジ教室「レベルアップ教室」を持って運営する登山学校の開催の提案をして賛同を得た。今後プロジェクトチームを発足させる事とした。

⑲青年部(藤寄)：3月1日の例会にて吉川氏からヒマラヤの報告会をする。2月25日・26日に米山さんを招いてイグルー山行を行う旨の報告をした

出席：高橋、佐野、市川、尾上、鈴木、小川、星、藤寄、天野、南川、前田、井上、箕浦、毛利、金谷、片岡

【2017年2月常務委員会】

日時：2月22日(水)19時00分～21時00分

1. 支部長挨拶(高橋)；次年度の体制を決めつつある。10年前の本部の平均年齢が65歳だった(現在68歳)。東海支部は64歳、広島支部は63歳で東海支部は第2位だった。各委員会は自分の後継者を育て活性化を進めてほしい。次年度からは似たような委員会はグループ化を図り、外に対しては“見える化”を図りたい。

2. 委員会報告

① 支部友委員会(金谷)：1月の山行報告は、神石山を実施したが2件は応募者が少なく中止となった。2月の山行予定は3件、全て問題なく終了した。支部友ミーティングは、第22回2月14日「スマホを山で活用しよう」鈴木慎吾委員長にお願いして、支部友32名・支部19名と盛況だった。支部友会便りについては4月1日に発行します。現在会員数は60名で変動なし。7月～12月の支部友山行の計画はすべて計画が出たので4月1日の支部友会便りに掲載する。今後の予定としては3月6日の支部友委員会、4月11日は駅前アルプスの千葉さんを招いて、最新グッズの話を用意している。

② 会計(市川)：来月の常務委員会で各委員会にお渡ししてある、委員会費用の報告書と領収書の提出をお願いしたい。

③ 岳連(市川)：今月は特になし。

④ 山行委員会(鈴木・欠席)：資料を配布参照。報告事項として、ホームページに掲載と同時に満員になってしまい申し込めないという不満の声がある。事前アナウンスメールを配布することにより公平性を増していく事を考えたい。

⑤ 亀の会(加藤)：会員は、後期高齢者が増えているが概ね山歩きを楽しんでいる。ただ年齢上バランスが衰えハットヒヤリングがあるので今後注意喚起していきたい。視覚障害者は今

年度1人増えて4人となった。山行計画として来年度、特徴的な物は大坪さんが米寿になるので4月に静岡の櫛立山888mの山を計画する。また4年前に行った飯島町の唐笠山が、亀の会の山行が引き金になって傘山が飯島町の観光シンボルになった。また焼酎としても“傘山”が発売されるようになった。

⑥ 猿投の森づくりの委員会(小川)：会は多くの行事をしているが、沢山の人が活動に参加してくれることを望んでいる。3月4日の炭焼き体験。3月7日のわいがや講座、テーマは樹木医として環境型活動を目指して。3月18日は「春を探して」のテーマで自然観察会を行うのでご参加を。4月のイベントとしては4月2日に“長久手まちセンまつり2017”は長久手市の街を宣伝するものでこの中にブースを作って亀の会も猿投の森づくりの会のコーナーを作って参加している。4月8日には猿投の森の行事になっている山桜観桜会を行う。昼からは自然観察会や間伐体験、また午前10時から「瀬戸子供こまいぬ座」の演奏会も予定しているので参加してほしい。

⑦ 支部報委員会(星)：原稿未提出の方は今週中に原稿提をお願いしたい。3月31日に発送するので3月20日には印刷仕上りの予定。また、2月28日に、沖 允人インドヒマラヤ編集長の日本山岳グランプリ受賞の祝賀会開催予定。参加予定は現在約50名、うち東海支部からは17名出席となっている。さらに声掛けをお願いしたい。

⑧ 青年部(藤寄・欠席)特に報告事項はない。

⑨ 登山教室委員会(天野)：中日と朝日の2教室は4月以降も継続の予定。今年も年間を通して指導員研修を実施する予定。駅前アルプスの千葉氏からの依頼でトヨタ自動車の労働組合から組合員に対して登山・ハイキングを企画したいそう労働組合が計画をしてJTBが旅行業として請け負う事になり、支部に現地指導員の派遣の依頼があった。4月には講義を実施、5月には御在所へ行くということで今のところ35名から40名位の人達を連れていく予定。指導員として6名位の派遣依頼があったので受ける事とした。

⑩ 自然保護委員会(南川)：第7回東海支部自然観察研修山行は、今年の計画については2案出ている。①木曾谷の人工林と自然林の観察・②立山の美女平森林と弥陀ヶ原の自然観察、のどちらかで決める。また、7月9日・10日に

全国自然保護集会を今年は岐阜で行う。テーマは「外来種に怯える山の植物たち」フィールドスタデイは伊吹山で行う。また、猿投の森の動物調査について、シカが増えており5~6頭の群れで現れるようになった。今後どうするか心配な状況になった。その他、インク代とカメラの交換電池で10,064円の支出をした旨会計報告あり。

⑪ 図書委員会(石田)：支部蔵書紹介を年4回12冊行ってきた。年間で貸し出し状況は16冊、受け入れ状況は7冊(何れも2/21現在)で本を読んで貰い広がりができればと思っている。平成29年度も同じような形で紹介していく。

⑫ ボランティア委員会(前田・欠席)：資料配布有り。

⑬ 写真展実行委員会(井上・欠席)：資料配布有り。箕浦さんより2月16日・17日の美ヶ原の報告があった。また東海支部でカレンダーの発行する計画に対し、写真展委員会で制作を担当してほしい旨正副支部長会議で発案があった旨箕浦委員に報告。支部長と井上委員長にて要検討とする。

⑭ 総務(毛利)：総会は5月20日に開催する。場所はOMCビルの4階の講堂、開始は午後4時、講演を日山協会長の八木原氏にお願いしている旨報告。また、山田トシ会員とカナダのワディングトン山群縦走をした谷さんに懇親会の席で報告をしていただく計画をしている。また、日本山岳会本部組織図と行事予定を配布。

⑮ 登山学校開校の件(尾上)：今回の計画は自主運営をしてレベルを高めようとするもので、あるいは支部員のニーズに応える観点から自主的な登山教室を行い、更には若い人たちの入会促進を図れるようにしたい。山登りの基礎から教えて日本山岳会の新しい組織の在り方を模索する必要があると考えている。新しい試みとしてやってみようじゃないかと言う事になったので了承を得る為にも常務委員会に諮る事になった。運営は登山学校運営委員会を設置して進める事にしたいと思っているので新しい運営委員会の設置を認めて戴きたいとの事だった。また、支部友、支部員の参加も求めて反応を見てみたいので、開講案内を4月の支部報に挿入をしたい。支部長を先頭に運営委員会で率先して進めるようお願いしたい旨の報告があり常務委員会で承認された。技術向上委員会の関わりについては再検討要。

⑯ JACからのグッズ販売について(佐野)：JAC

および東海支部の収益事業としてグッズ販売を行う事にした。販売窓口を駅前アルプスとし、グッズに JAC マークと個人名を記入する。7月の支部報にて販売案内を行う計画である旨報告。

出席：高橋、佐野、片岡、尾上、市川、加藤、和田、星、南川、石田、天野、小川、箕浦、毛利、金谷

総務委員会 毛利邦男 記

ル ー ム 日 誌

1 2 月

- 1 日 (木) 写真展委員会
- 2 日 (金) 古道塩の道
- 5 日 (月) 支部友委員会
- 6 日 (火) 県岳連
- 7 日 (水) 青年部・TNCC(同好会)
- 8 日 (木) 自然保護委員会
- 9 日 (金) ASC
- 12 日 (月) 登山教室委員会
- 13 日 (火) 支部友ミーティング
- 15 日 (木) 東海学生山岳連盟
- 18 日 (日) 東海 YOUTH
- 19 日 (月) 読函会・図書委員会
- 20 日 (火) ボランティア委員会
- 21 日 (水) 山行委員会・総務委員会/
正副支部長会議
- 22 日 (木) 技術向上委員会
- 26 日 (月) 支部報発送
- 27 日 (火) 猿投の森運営委員会

1 月

- 6 日 (金) 古道塩の道
- 10 日 (火) 登山教室委員会
- 11 日 (水) 支部友委員会
- 12 日 (木) 自然保護委員会
- 16 日 (月) 読函会・図書委員会

- 17 日 (火) ボランティア委員会
- 18 日 (水) 山行委員会・総務委員会/
正副支部長会議
- 19 日 (木) 東海学生山岳連盟
- 20 日 (金) スケッチクラブ
- 24 日 (火) 猿投の森運営委員会
- 25 日 (水) 常務委員会
- 26 日 (木) 技術向上委員会
- 27 日 (金) 亀の会 (14 時～17 時)

2 月

- 1 日 (水) 青年部・TNCC(同好会)
- 2 日 (木) 写真展委員会
- 3 日 (金) 古道塩の道
- 5 日 (日) スケッチクラブ
- 6 日 (月) 支部友委員会
- 7 日 (火) 県岳連
- 9 日 (木) 自然保護委員会
- 13 日 (月) 登山教室委員会
- 14 日 (火) 支部友ミーティング
- 15 日 (水) 山行委員会・総務委員会/
正副支部長会議
- 16 日 (木) 東海学生山岳連盟
- 20 日 (月) 読函会・図書委員会
- 21 日 (火) ボランティア委員会
- 22 日 (水) 常務委員会
- 23 日 (木) 技術向上委員会
- 28 日 (火) 猿投の森運営委員会

会員異動

入会：早戸健太郎(16110) 三浦 裕(16122)
山田菜美(16128) 大須賀浩太郎(16131)
尾関祐一(復活)(5822)

退会：立松美保(15907) 山口 孝(12841)

物故：長谷川利鎌(13413) 武田 康 (12754)

I N F O R M A T I O N

【総務委員会からのお知らせ】

【平成29年度支部総会・懇親会のお知らせ】

支部総会を下記日時と場所にて開催します。支部員皆様のご出席をお願い致します。

本年度は来賓として日本山岳協会の八木原 圀明会長と愛知県山岳連盟安藤武典会長をお招きする予定です。また、懇親会には先般山田 トシ・菊池会員とワディントン山群を踏破した谷氏も参加予定です。

期 日：平成29年5月20日(土)

時 間：総会・来賓講演：午後4時～6時

懇親会： 総会・講演終了後

場 所：総会・講演：OMCビル4階講堂(412)

懇親会： 東海支部ルーム

会 費：懇親会参加者2,500円程度

(学生：1000円)

※同封した返信用ハガキに総会・懇親会出欠を明記の上、速やかにご返送ください。尚、総会

欠席の方は委任状のご提出も併せてお願いいたします。 総務委員長 毛利邦男

・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

【第5回夏山フェスタ開催のお知らせ】

第5回夏山フェスタが下記要領にて開催され、東海支部も全面的にバックアップしています。

日 時：6月17日(土)～18日(日)

場 所：愛知県産業労働センター
ウインクあいち 7F・8F

主 催：夏山フェスタ実行委員会

事務局：中部経済新聞社 事業部

イベントの内容：

- ① 山に関する各種セミナー、著名人(南谷真鈴さん、近藤健司さん、村越真さんら内定)多数の方のご参加をお願いいたします。
- ② 山小屋座談会(山小屋オーナーの本音トーク)各地区から3名ほどを予定。
- ③ 登山用品メーカー、関連団体、自治体などによるブース出展・東海支部も相談コーナー。今回より最新の登山用品セミナーを開催予定。
- ④ 山岳写真展など。

※支部以外にもPRをお願いします。

総務委員長 毛利 邦男

【写真展実行委員会からのお知らせ】

下記のような写真撮影山行を企画しています。是非、参加をご検討ください。

写真撮影山行では、登攀・歩行を少なくし、写真を撮影できる自由時間を多くした、山の景色や花などの撮影対象が多い場所への山行を計画しています。カメラはコンパクトデジカメ、三脚無しでもOKです。

- ① 西穂高
 - ・月日：4月28日～29日 1泊2日
 - ・交通手段：公共交通機関又は自家用車
 - ・宿泊：西穂山荘
 - ・撮影対象：雪の穂高連峰
 - ・申込締切：4月15日
 - ・独標を目指しますが、ゴールは天候と参加者の状況で変更します。
- ② 御在所岳
 - ・月日：5月13日 日帰り
 - ・交通手段：現地集合
 - ・撮影対象：アカヤシオ、シロヤシオ
 - ・申込締切：4月15日
- ③ 御嶽自然湖
 - ・月日：6月11日～12日 1泊2日

- ・交通手段：電車+送迎バス
- ・撮影対象：地震で出来た自然湖、昔の大正池を思わせる景色
- ・申込締切：5月15日

④ 蝶ヶ岳

- ・月日：7月20日～22日 2泊3日
- ・交通手段：公共交通機関又は自家用車
- ・撮影対象：残雪の北アルプス槍・穂高の眺望は圧巻です。
- ・申込締切：6月15日

※東海支部のHPに詳細が掲載してあります。メニューで「写真展実行委員会」をクリックしてください、

※月日や行程、移動方法は参加希望者との相談で変更する可能性があります。

※参加希望、問い合わせは、井上(090-6590-6669, shasin@jactokai.net)または、写真展実行委員までご連絡ください。

写真展実行委員長 井上 寛之

◇石岡繁雄生誕百年記念企画展の御案内◇

東海支部の設立発起人の一人である氏の、生涯をかけた遭難防止の研究成果の足跡を辿る展示会が開催されます。

期 日：7月18日～9月3日 9時～16時

場 所：上高地インフォメーションセンター2F

主 催：石岡繁雄の志を伝える会

後 援：北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会

協 力：名古屋大学博物館など

※入場は無料です。上高地へ行かれる方は、是非会場へお寄りください。

支部報編集委員会

編集後記

トップに支部主体の登山学校の記事を持ってきました。大いなる企てです。皆様、応援下さい。また、支部の創設期を知る沖 允人氏の第6回日本山岳グランプリ受賞等、多彩な紙面となりました。

ところで、支部評議員の尾上 昇さんが、5月1日より中部経済新聞連載の「マイウエイ」に登場します。「山」が主体だそうです。乞御期待。

星 一男

海外トレッキングのパイオニア!



世界の山旅を手がけて47年
アルパインツアー株式会社

“山仲間でオリジナルツアーを企画しませんか?”
説明会にお伺いします。お気軽にご相談下さい

名古屋 052-581-3211
〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-23-2 (第3千福ビル3階) www.alpine-tour.com



ATLAS TREK

ハイキングから本格的な高峰登山までお気軽にお問い合わせ下さい。
観光庁長官登録旅行業第1167号 / (社) 日本旅行業協会正会員

株式会社アトラストレック

名古屋サービスデスク TEL: 052-788-2422
(東京本社転送電話)

【東京本社】〒180-0008 東京都新宿区三栄町25番地 三栄ハウス202
TEL: 03-3341-0030 FAX: 03-3341-9200 E-Mail: info@atlastrek.co.jp
ホームページ <http://www.atlastrek.co.jp/>

SINCE 1975
mont-bell

ウェア・ギアに
遊び心もそろえて
お待ちしております!

アウトドア用品は、
機能的なアイテムが豊富にそろう
「モンベルストア」へ。



- 名古屋店 愛知県名古屋市中区栄3-18-1
ナディアパークロフト 6階
- 長久手店 愛知県長久手市片平1-901
- 名古屋みなと店 愛知県名古屋港区品川町2-1-6
イオンモール名古屋みなと 3階
- 各務原店 岐阜県各務原市那加堂場町3-8
イオンモール各務原 2階
- 長島店 三重県桑名市長島町浦安368
三井アウトレットパークジャストリーム長島 2階
- 鈴鹿店 三重県鈴鹿市庄野羽山4-1-2
イオンモール鈴鹿 1階
- 新静岡店 静岡県静岡市葵区鷹匠1丁目1-1
新静岡セノバ 4階

アイコンのある店舗では、アウトレット商品も取り扱っています。

モンベル・カスタマー・サービス
☎0088-22-0031 / TEL.06-6536-5740 www.montbell.jp
※フリーコールは携帯・IP電話からご利用いただけません。

建設業許可を取りたい、日本国籍を取得したい(帰化)、遺言を公正証書で作成したい、戸籍謄本や除籍謄本を代行取得して欲しい、任意成年後見の相談をしたい、会計記帳を頼みたい等々

ご相談は行政書士の西山秀夫へ

〒460-0002名古屋市中区丸の内3丁目21番21号
(地下鉄・久屋大通駅から徒歩から2分) 丸の内東桜ビル1004号室

TEL: 090-4857-9130

URL: <http://www.nygs-office.com/>

企画・デザイン・印刷



株式会社 浅井隆文社

〒453-0801 名古屋市中村区太閤四丁目8番3号
TEL (052) 451-6656 FAX (052) 451-6657
E-mail: ta@asai-rbs.co.jp

◆◆◆◆◆ OMC ◆◆◆◆◆

住いのコンサルタント

(有) 富士見企画

〒460-0014
名古屋市中区富士見町8番8号

◆◆◆◆◆



(株)ワークシステムサービス

一般社団法人 日本自動車運行管理協会
一般社団法人 中部地区自動車管理業協会

- ・一般貸切旅客事業
- ・車両運行管理事業
- ・愛知県知事登録旅行業
- ・労働者派遣業
- ・ビル清掃管理事業
- ・介護支援事業

〒465-0021 名古屋市長東区猪子石3丁目113番地
TEL 052 (779) 8777(代) FAX 052 (779) 0031
<http://www.work-system.co.jp/>